

イ ソ ド ク グ モ の 習 性

藤 田 衛

福井縣坂井郡鵜村砂子坂

On the habit of *Lycosa fujitai* Uyemura.

By Mamoru Fujita.

本種は畏友植村利夫氏が今回本誌に御發表下された福井縣産としての最初の蜘蛛の新種であり、ドクグモ科 Fam. Lycosidae としては、珍しくも海濱の砂地に管狀の住居を作つて隱遁生活(後文參照)を營むと云ふ極めて興味ある習性をもつた巨大なドクグモの1種である。この蜘蛛の習性に就ては昨年(1928)10月26日開催された福井縣博物學會總會に於て、“イソドクグモ(假稱) *Lycosa* sp. の習性”と題して、豫報の意味で極く簡単に概要を發表してをいた。以下記す本報は不備の點は勿論のこと且未觀察の點の多々あることは云ふまでもないが、特に植村氏の慈愼に従ひ、前記發表のまゝを記し、大方の叱正を仰いで他日補足したい考である。此の豫報が多少とも資料となれば著者の欣幸之に過ぐるものはない。本報を稿するに當り、新種と同定して御發表下された植村利夫氏に深甚の謝意を表します。

I. 棲 息 所

福井縣坂井郡三里濱海岸の渚より凡そ140—150米の所の砂地に棲んで居るこの海岸には渚より約100米を距て、砂防垣が作られてあるが、それを中心に兩側約30米の所に最も多く棲んでゐるやうである。彼等は特に海濱植物の生えて居ない日光の直射する所を選んで住居を營んでゐる。この海岸でも濱四郷村地籍に最も多く棲息し、他は稀薄である。只今の處本種も海濱性のクモの一種

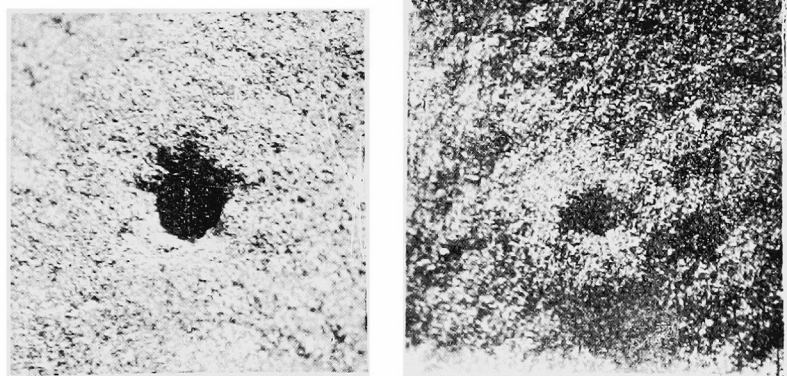


Fig. 1. *Lycosa fujitai* の住居（左の方には蓋がなく、右の方には蓋がある。）

として置きたいと思ふ。

最初に採集したのは、昭和10年11月中旬であつた。其後植村氏より珍品との御來信に依り俄然彼等に關心を懷くやうになつた。

彼等を採集するには、管孔を見つけて乾燥した砂を住居に入れてそれを目安として掘下げて採るか、又は細い木片を入れて掘下げることにしてゐる。住居の周圍には植物の根等は決して見ることが出来ないと云ふのも、彼等が造巢の上に障害を來たすからであらう。

II. 一 般 性

本種もスズキドクグモ *Lycosa suzuki* Kishida と同様に動作は非常に敏活で、且狂暴な性質を有してゐる。即ち試に棒の先で突くと忽然として向き直るや否や、第1歩脚を高く挙げ、頭胸部をぐつとそらし、黒い毒々しい頭胸腹部下面を表して威嚇しながら棒へ飛びつき、咬みついて仲々離れようとしなない。不幸にして指でも咬まれると、實に痛くて二・三日位はしくしくと痛むのが常である。内地産としては前記スズキドクグモより以上に勇敢なクモではないかと愚考する。

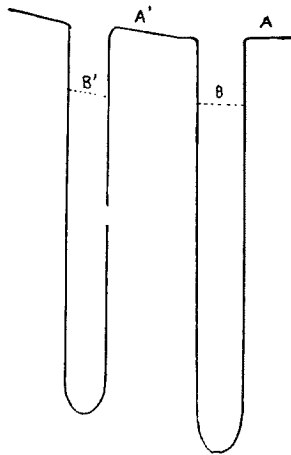


Fig. 2 住居模式圖 A は平面 A' は B B' 斜面は糸を張れる部分 (藤田原圖)

III. 住 居

a. 隱遁生活

ドクグモ科 Fam. Lycosidae に屬するものは殆んど狩獵性のもので、始終地上や草上を走り廻つて、小さい昆虫や小蜘蛛を捕食してゐるが、本種は少なくとも著者の野外觀察に於ては老幼共に決して流浪生活を營まず、海岸の砂地に管狀の住居を營巢して、隱遁生活をしてゐる。

b. 住居の構造

住居は老幼共に、平面及び斜面に於ても、重力の方向に住居を作る (fig. 2)。成熟せるものでは住居測定表に示す如く徑15mm 乃至 28 mm で、底まで一定した直徑を有してゐる。長さは15 cm 乃至 30 cm 位で、幼體に於ては徑及び長さは短かくて小さい。雄は雌に比較して長さは甚だ短かく 3cm のもあつた。管口より 2 cm 内外の深さ迄糸を張りつけてゐるが、それより内部は張つてゐない。厚さは薄くて、クサグモ *Agelena limbata* Thorell の雌の管狀のやうなものである。そしてクモはこの住居の糸を張つてある下部の内面に上方に向つて棲んでゐる。

産卵前及び産卵後、越冬中は、必ず蓋をしてゐる (Fig. 1)。蓋は管口の周圍の砂を糸を以つて綴り合せたものである。

自己の脱皮殻や昆虫類の食ひ残りや糞は管底に置いてある。爲にか？管底は甚だ堅いのが多いやうである。(勿論成熟せるもの)。

c. 住居の製作

飼育瓶に棲息場所の砂を八分程入れ、適當に砂を潤して人差指で一吋穴をあけてやると、早い時は十分位で、準備工作とも云はうか？あけてやつた穴の周圍で第1歩脚の腿節、轉節、基節を觸鬚や大顎で叮嚙に嘗めるやうにする。

住 居 測 定 表 (單位 mm.)

	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7
Sex	♀	♀	♀	♀	♀	♂	♂
Bore	15	18	21	26	28	19	20
Depth	150	174	220	270	300	30	140

其の間、4分餘を要して終ると、今度は第2歩脚も同様にして、10分餘で準備行動を終了。いよいよ住居の工作に取りかかる。先づ穴に入り、第1歩脚、大顎、觸鬚をスコップの代用として砂を掘り、大顎、觸鬚で砂を押し上げて來ては穴の周圍に運び出す。同様な方法で一定の深さまで掘下げる。其の間深さ7 cm 位で30分位要する。次は上部内の周面に糸を張るのであるが、上つて來る時は縦糸を、下る時は横糸を左右張りながら下り (fig. 3), 約10分餘で周面を完全に張り、工作を完了する。

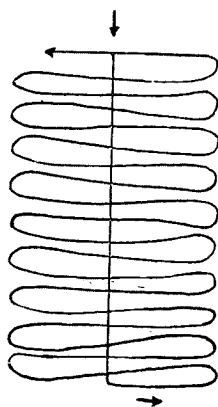


Fig. 3. 住居の絲の張り方模式圖
(藤田原圖)

蓋を製作するには、第4歩脚で周圍の砂をかき寄せては糸で綴り合せ、周圍を順序よく廻りながら完了する。そして蓋の中央に針の穴程の穴を作る。これは空氣の通路であらう。

IV. 性 性

性は未觀察で残念であるが、3月—4月の頃成熟する。求婚方法や交尾體型は、他の *Lycosa* 屬と同様であらうと思ふが、その場所が住居内で行はれるか、若しくは住居外で行はれるか問題である。

V. 産卵及び孵化

本種の産卵期は、3月下旬乃至4月上旬で、卵囊は

如何に製作されるかは未観察である。

卵囊は淡い blue gray, 即ち青鼠色で, 球形扁平で, 大きさは 13 mm 位ある。最も成雌の體の大小は比例してゐる。この卵囊は他の *Lycosa* の仲間と同様に蛛疣につけて巢の真中位の所に棲んでゐて, 管口は前述のやうに必ず蓋をされてゐる。雌は至つて母性愛強く巢より取り出せば抱くやうにして上顎及び觸肢にておさへ, 直に腹部を曲げて蛛疣より太き糸を出し, 卵囊につけ運び去る。急を要する時は口器につけて運び去らうとする。他の卵囊と取り換へても, 自己の卵囊と考へてか, 直に前述のやうにして運び去るとは, 誠に面白いものである。

4月下旬—5月上旬頃孵化して, 仔グモは母グモの腹部背面の毛に依つて生活し, 程なく親から離れ, 小さい管狀の巢に棲むやうになる。さて母グモが産卵してから仔グモが離れゆく迄 巢に蓋を作つてゐる事から考へると, 其の間は絶食するのではないかと思考する。

VI. 食 性

昆蟲や小蜘蛛を巢に待ち受けて捕へる。晝間のみ巢に住居し, 夜出で獵するかは疑問であるが, 未だ觀察の好期に接しない。

VII. 越 冬

冬期11月—2月迄, 降雪期間で, 必ず前述の如く住居に蓋をし内部殊に深くひそんでゐる。

VIII. 害 敵

オホモンクロベツカフ *Pompilus atrocissimus* Dolla Torre. が彼等の住居内に入りて狩する。又暴風の爲に住居が埋れて死する數も可なりある。

〔附記〕 ファーブルの研究に依つて有名なナルボン・ライコーサの住居には, 穴の入口の周圍に 小石や小枝や枯葉の斷片を綴り合せた井筒狀の壁がめぐらされてゐることであるが, 本種の場合には斯かる建築物を認めることが出来なかつた。材料を與へて實驗してみたいと思つてゐる。